



名人を訪ね、「聞き書き」する
高校生を受け入れてみませんか？

第24回 聞き書き甲子園

協力市町村(地域)公募のご案内

【主催】聞き書き甲子園実行委員会

(農林水産省、文部科学省、環境省、公益社団法人国土緑化推進機構、NPO 法人共存の森ネットワーク)



第24回

聞き書き 甲子園 の流れ



[これまでの協力地域]

「聞き書き甲子園」の開催は、各市町村の農林水産課をはじめ、企画課、地域振興課等にご協力をいただいています。また、地域団体と連携し、ご協力いただいた地域もあります。

- ◎ 第18回受入れ地域(12地域)
- ◎ 第20回受入れ地域(11地域)
- 第21回受入れ地域(14地域)
- 第22回受入れ地域(13地域)
- ◎ 第23回受入れ地域(11地域)

※第19回開催は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、中止しました。

全国61地域で実施

2024 [令和6年]

5月

9月

11月以降

協力市町村(地域)を公募

応募書類を提出ください。
10月末までに採択結果を通知します。

高校生が取材する「名人」を推薦

地域の「名人」※原則6～8名をご推薦ください。

※推薦いただく「名人」は、林業、水産業、工芸など、森・川・海など地域の自然とかかわる仕事に長年従事し、先人からの知恵や技、心を受け継いできた概ね60歳以上の方を想定しています。

※推薦名人の人数はご相談いただけます。

協力市町村 (地域)の声

「聞き書き」は、それぞれの作品ができる以上の成果がありました。高校生の純粋でまっすぐな質問は名人の心の奥に届きます。名人は深く自らの心の中にもぐり、答えを探します。名人は、「聞き書き」を通じて人生の棚卸をしているようでした。生きてきた道を振り返る名人の顔はとても穏やかです。そのような名人の姿を見ることで、高校生もまた自分の人生を深く考えるきっかけとなりました。参加したことが進路を決めるきっかけとなった高校生もいました。

(新潟県柏崎市市民活動支援課・特定非営利活動法人 aisa)

2025 [令和7年]

2026 [令和8年]

5月
中旬

推薦いただいた「名人」の人数に応じて全国の高校生を募集

高校生の募集とあわせて、協力市町村(地域)決定のプレスリリースを行います。

8月
中旬

研修会への参加

参加高校生の研修会を開催します。各市町村(地域)担当者は、1泊2日でご参加ください。「聞き書き」する高校生と「名人」のマッチング等を行います。

8月
下旬

高校生による「聞き書き」取材のサポート

「名人」の取材は、原則として高校生が一人で行います。取材日は、事前にお知らせしますので、必要に応じてサポートをお願いいたします。

高校生の「聞き書き」と
作品づくりの期間

12月
下旬

「聞き書き作品」の内容を確認

「作品集」を製作するにあたり、高校生が提出した作品内容をご確認いただけます。

3月
下旬

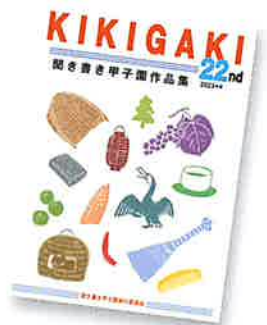
フォーラム(成果発表会)への参加

優秀作品には大臣賞等を授与します。参加高校生は、取材した地域ごとに発表を行います。当日は「名人」の代表者数名もご招待し、登壇いただきます。各市町村(地域)の皆さまも、当日、ご参加ください。

4月
下旬

「聞き書き作品集」を配布

参加した高校生のほか、関係機関等に「聞き書き作品集」を配布します。各市町村(地域)には、「名人」の人数分プラス10冊を贈呈させていただきます。また、作品データをお渡しいたしますので、広報等にご活用ください。



5月

協力市町村(地域)による地域発表会の開催(任意)

市町村(地域)単位の地域発表会の開催をご検討ください。開催にかかる費用の一部は実行委員会が補助します。

都城市立図書館は、全国の聞き書き作品を収集していく方針の下、「聞き書きコーナー」をつくっています。図書館の運営理念は「ひとりひとりが《だいじなもの》をみつめていくために」としていますが、「聞き書き甲子園」はまさに名人たちの仕事や暮らしの中から《だいじなもの》をみつめていく機会になったのだらうと思います。高校生に連れられて名人ご夫妻も図書館にいらっしゃいました。ひとつもつなげていく素敵な取り組みです。

(宮崎県都城市生涯学習課・都城市立図書館)

「木のまち鹿沼」を支える「名人」の想いととも、地域の歴史を伝えられる素晴らしい機会をいただきました。今回はオンラインでの取材となりましたが、高校生と共通の趣味で話が盛り上がり、終始笑い声が聞こえる楽しい聞き書きが行われ、参加して本当に良かったと感じています。「その生業は自分の一部」と話す名人のひとつひとつの言葉が、人生の岐路に立つ高校生の背中を押してくれました。彼らにも生きがいのような仕事が見つかることを願っています。

(鹿沼市経済部林政課)

「クヌギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐の農林水産循環」は、平成25年に世界農業遺産に認定されました。この地域の営みを未来に伝える取り組みの一つとして、農林水産業に真摯に向き合う人々の姿を高校生に知ってほしいと考え、地元の高中生による「聞き書き」の活動を続けています。今回は全国の高校生が名人の知恵や技術のみならず、それぞれの想いをも受け止めてくれたに違いないと、彼らの今後に期待しています。

(大分県農林水産企画課 世界農業遺産推進班)



聞くことから、 はじまる

「聞き書き」の基本は「聞く」というコミュニケーションです。

「聞き書き甲子園」に参加した高校生は、日本各地の名人を一人で訪ね、一対一でインタビューをします。

名人との対話はすべて録音します。そして、その録音を一言一句、書き起こします。高校生はインタビューに費やしたエネルギーの何倍、何十倍もの手間と労力をかけて、再び名人と向き合うのです。

書き起こしが終わったら、不要な部分を削除し、整理します。そして名人の語り口を生かした、一人語りの作品に仕上げます。

出来上がった作品を読むと、まるで名人自身が、その半生を私たちに語りかけてくれているかのようです。

森、川、海、里、自然の鼓動に合わせ、延々と続いてきた暮らしの連続。

そこで培われた知恵を聞き、次の世代へ心を伝えていくことが「聞き書き」の意義です。

長年、働きつづけた人たちは、どのような思いを持ってきたのか。

地域の自然と、どのように向き合ってきたのか。

人と人は、なぜ、助けあい、支え合って生きてきたか。

生きるとは何か。働くとは何か。家族、仲間、そして地域とは何か。

高校生は、それらの事柄を通して、懸命に生きてきた人の息遣いを感じることができません。

そして名人の心に寄り添い、その生きてきた情景に、自身を重ねようとするのです。

ある高校生は言いました。

「名人の話は、いつの間にか、自分が言いたいこと（伝えたいこと）になった」

初めての土地を訪ね、その地で働きつづけてきた名人と出会い、「聞き書き」に取り組んだ高校生の作品をご覧ください。作品を読んでいただければ、きっと、その人に興味を持ち、その人が生きてきた風土を好きになります。

以下のページには、『第18回 聞き書き甲子園 聞き書き作品集』（令和2年3月発行）より、高校生の作品の抜粋と感想文を掲載します。



渡部 和夫

漁業・69歳・山形県酒田市（飛鳥）

刺し網ってというのは、条件によって目の大きさが異なる。たとえば、トビウオ網だと目が細かい。メバルだとそれよりも大きい。タイとかカワハギだともっと大きくなる。だから網の数も100とか150ぐらい持っています。冬、時化^{しげ}て海に出られないときは、いつも作業場で網の修理をしています。仕事しないのは元旦の日だけ。魚って平らなところにはいなくて、海底が上がったり下がったりして隠れやすいところにいるんです。そういうところだと網が引っかかって、切れてしまう。でも、それを恐れてはならない。切れても切れてもまたやるっていう、ド根性みたいな気持ちになきゃダメ。負けても負けても挑戦する。そうしないと成長できないんだから。

負けても負けても挑戦する。
そうしないと成長できないんだから。

何か変わりたい。そう思っていた私の目に留まったカラフルなポスター。それが聞き書き甲子園でした。参加しなければ一生経験しなかったであろう海の名人との対話。スマホの中で凝り固まっていた私の世界を大きく広げてくれたように感じました。「負けても負けても挑戦する。そうしないと成長できないんだから」という和夫さんの言葉は、何か行き詰ってしまうと諦めてしまう、私のやわやわな心に深く突き刺さりました。初めての場所で、初めて会う人と、初めての聞き書き。いろいろな初めてを経験して、人間として一回りも二回りも成長することができました。ありがとうございました。

尾形輝（宮城県 聖和学園高等学校2年）

仕事は、和紙の原料の楮の栽培、加工、販売。楮は根元から伐って、蒸して、一本一本、幹の皮を手作業で剥ぐ。幹から剥がした皮に黒い皮や、甘皮っていう緑色の皮がついてるのを小包丁で剥いで白くするんだ。私の仕事としては、この表皮取りが一番手間かかるな。上手な人でも一日で一貫目(3.75kg)が精いっぱいだね、それでも早い方だ。

黒皮、甘皮を取って、大子町の冬の乾燥した寒風に2日くらい晒して干すんだ。そして、そのまま商品として出荷するのではなく裏側まで見て小さなゴミや虫食い、腐った部分は取り除いてから出荷するんだ。そうすると紙漉き屋さんの「塵取り」(楮を水に漬けてゴミやホコリを取る作業)の負担が軽くなるから。うちの楮の量は少ないけど、品質は日本一の自信がある。良い和紙のために栽培し、加工して使われるってことはやりがいだね。



齋藤邦彦

楮栽培・74歳・茨城県大子町

取材のときに齋藤さんが「楮の仕事は目立たないけど、和紙として日本各地、世界に行ってるから嬉しいね」「楮がなくなったら紙漉き屋さんが和紙を漉けなくなるから、頑張らないと」とやりがいと使命感を語ってくれたことが印象に残っています。栽培し加工している大子那須楮への自信と誇り、そして和紙職人を尊重していることを改めて感じました。この作品が齋藤さんの人物像だけでなく、楮について知ってもらおう一つのきっかけになってほしいと思います。

遠藤愛斗(岩手県立盛岡農業高等学校1年)

菅笠は一年中使えるからね。雨でも大丈夫だし、お天気にもいいしね。田舎にはみんな根付いてますね。この辺の人はみんな、笠、作ってきたんだよ、個人で。上手にしろ、下手にしろ。でも今、作る人はいませんね。

私が続けているのは、作るの好きだから。あとは、皆さんが必要としてくださるんで作っている。雪国の人は、雪降ろしに屋根に上がるときには必ず、笠かぶらせるの。ヘルメットはつばが小さいでしょ。万が一、上から落ちた場合、笠はね、顔と雪が落ちてくる間に空気の場所ができるの。そうすると命が助かる。だからね、必ず冬はね「笠かぶって上がれ」って言われたもん。昔の知恵って、たいしたもんですね。



昔の知恵って、たいしたもんですね。

名人は、きっと伝統の保護に強い思い入れがあるのだろうと思っていました。ですが、中西さんの菅笠に対する考えはシンプルでした。楽しいから、好きだから。それは私が思っていた伝統のカタチとは違っていました。しかし、書き起こしをしていると、中西さんの姿勢の方が本来あるべき姿なのではないかと思い始めました。伝統を守ることだけを意識し過ぎると、保護という、カタチだけの継承にこだわってしまうかもしれない。伝統はカタチだけではなく、その魅力とともに語り継がれるべきなのではないか。カタチだけを重視することが、逆に伝統を廃れさせているかもしれないということに気づかされました。 **橋場そよか** (群馬県 ぐんま国際アカデミー高等部2年)



矢内敏弘

製材・75歳・徳島県神山町

仕事は製材業です。木材を刻むんですよね。木は生きています。呼吸しているんです。色が変わったり、艶が出てきたり、いろんなことがある。寒帯や熱帯から来た木は、日本の気候には合いません。四季があるから。寒いところから来た木は夏の暑さに弱い。色がすぐに黒くなって艶がなくなるんです。しかし日本の木は、時とともに木に艶が出て、住人に馴染んでいきます。私のこだわりは、せつかく生まれてきた木だから、とことん世の中のために使ってあげる。普通だったら、2・3・4メートルというのが市場で売られている木材の規格なんよ。でも、私は、40・75・110センチの3つに取り分けるんです。1本10円、20円の小さなお金を大事にして、その木を大事にする。木に食べさせてもらっているんです。

木は生きています。呼吸しているんです。

僕は正直、林業の知識は皆無に近く、名人の話を理解して取材できるか不安でした。しかし、矢内さんご夫妻は優しく接してくださり、僕にもわかりやすく説明してくれました。矢内さんは、たくさん苦勞をされてきた方で一つ一つの言葉に重みを感じました。人を大事にされていることも伝わってきました。いつも謙虚で、木に対する情熱が感じられました。「木に生かされている」という言葉は、矢内さんの仕事への姿勢が表されていると感じ、提出した作品の題名にしました。このような貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

中川拓哉（徳島県生光学園高等学校2年）

昔は、麦と大豆と桑と蚕。あと田んぼとか人参、ゴボウ、大根、いろいろなものを作った。奥三河天狗茄子もね。山菜もゼンマイとかフキとか採って。シイタケは、昔は山奥に菌入れに行ったの。今は採るに楽なように家のそばに置くわけ。ものを作ると、行ってみるたびに育ってくるじゃない。だんだん成長してきて花が咲いたり実がなったりするのを見ると、作るのが楽しみになる。地域おこし協力隊で来ている子にも蒔き方を教えてあげて、芽が出たらすごい喜んで。自分で作った野菜を食べられるとか、食べてもらえるものを作る楽しみが身についてくれば、一つの田舎のいいところを見てもらえるかなって。収穫して食べられる喜び、お客さんに食べていただける幸せ。過程を見られるのは愛情が湧くね。



村井 恵子

山菜採り・伝統野菜づくり
73歳・愛知県豊根村

豊根村は人口の少ない小さな自治体です。面積の9割が森林で、コンビニもありません。そんな場所を訪れるとき、私は不安でした。しかし恵子さんは私を笑顔で迎えてくれました。恵子さんはたくさんものを自らの手で育てています。普段食べているものも農家の方の想いが詰まったものなのだと改めて感じました。東京に届いた「お恵ちゃん農園」の野菜たちを見たとき、愛おしく思いました。恵子さんの優しさ。笑顔で人を包み込むような温かさ。何よりお百姓の仕事と村を大切に思っているところが素敵でした。恵子さんをはじめ村の方々が作る食材の良さを多くの人に伝えたい気持ちでいっぱいです。

竹中莉夏（東京都 東京女学館高等学校2年）

参加高校生の声



74歳のおじいちゃんが、こんなにもパワフルで、エネルギッシュで、目が生き生きしているとは知らなかった。

一つのことを打ち込む姿は、見ていて惚れ惚れした。

(宮崎第一高等学校2年 廣兼綾香)

名人の話を聞く中で、日本の森の「悲鳴」が肌を伝わるように感じました。

(石川県立金沢伏見高等学校2年 脊戸大樹)

技術は技術だけで伝わっていくのではないと思います。必ずその裏には、先人たちの想いや英知がこめられています。

(鳥取県立倉吉総合産業高等学校2年 高見亮摩)

地方創生について、本では理解していたのですが、そこにどんな人がいて、地方がどう動いているのかを考えたことはありませんでした。名人の想い、地域への愛。結局、カタチではなく、人なんだと気づくことができました。

(大阪星光学院高等学校2年 大和弘明)

自分の目で見、耳で聞き、手で触れることを通してこそわかることを大切にしていきたい。

そうすることで、身の周りのあらゆるモノ、コトが自分にとって“生きもん”に見えてくると思う。

(和光高等学校1年 片波見せるさ)

「聞き書き甲子園」は、以下の企業・団体等のご支援、ご協力により開催しています。

[募金・企業寄付] 株式会社ファミリーマート [協賛・協力] 公益財団法人一ツ橋文芸教育振興会、富士フィルムホールディングス株式会社、株式会社長塚電話工業所、株式会社トンボ、京王電鉄株式会社、株式会社ティムコ、公益財団法人 SOMPO 環境財団、株式会社ベネッセコーポレーション [後援] 総務省、全国知事会、全国市長会、全国町村会、全国山村振興連盟、一般社団法人全国過疎地域連盟、NPO 法人「日本で最も美しい村」連合

ファミリーマートは「夢の掛け橋募金」を通じて、この活動を応援しています。

あなたと、コンビニに、
 FamilyMart